

## ホモトキシコロジーで治療した骨髓異形性症候群から急性骨髓性白血病へ進行した犬の1例

○大池三千男<sup>1)</sup> 渡邊謙一<sup>2)</sup> 古林与志安<sup>2)</sup>

1) おおいけ動物病院 2) 帯広畜産大学

【はじめに】ホメオパシーは単一成分製剤を限りなく希釈して使用する同種療法で、古くから世界中で行われている。ホモトキシコロジーは、ホメオパシー薬を複合製剤として使用し、ホモ(homo=人)トキシン(toxic=毒)を解毒、排泄する治療法である。また、骨髓異形性症候群(MDS)は、赤血球、顆粒球、巨核球系細胞の成熟異常や細胞分裂異常が、どれか1系統、あるいは複数系統の細胞で発生する疾患である。MDSは、急性骨髓性白血病(AML)の前段階と考えられており、前白血病とも呼ばれている。MDSは犬では珍しくその病態も未解明な疾患である。化学療法の効果は証明されておらず、免疫抑制剤も使用している。今回、赤芽球系細胞のMDSがAMLに進行した症例を経過観察し、ホモトキシコロジーによる治療でQOLの改善が認められたので報告する。

【症例】雑種犬、雌避妊済み、13歳、体重14.3kg。頭部腫瘍摘出の為に血液検査を実施した。

第1病日、赤芽球が $1,550/\mu\text{l}$ (有核細胞中10%)と増加し、肝酵素も高値の為、抗生物質とウルソを処方した。

第54病日、赤芽球が $7,770/\mu\text{l}$ (有核細胞中37%)とさらに増加し、赤芽球症を呈した。2核の赤芽球などもみられ、赤芽球系細胞のMDSが疑われた。肝酵素は低下したが、手術は中止し、経過観察とした。

第465病日、特発性前庭疾患で来院した。赤芽球は $31,990/\mu\text{l}$ (有核細胞中70%)と著増し赤芽球症が進行していた。好塩基性赤芽球～前赤芽球段階の未熟な細胞も見られ、赤芽球系細胞のMDSと診断された。肝酵素は再び上昇していた。飼主は抗癌剤や免疫抑制剤の治療は望まず、ホモトキシコロジーの治療に同意した。Coenzyme compositum 1A 2mlとUbichinon compositum 1A 2mlを1週毎、ParaBenzochinon-Injeel 1A 1mlとGlyoxal compositum 1A 2mlは交互に1週毎、グルタチオン200mgを第5週から1週毎に皮下注射した。Lymphomyosot 1T bidの経口投与も終生続けた。

第688病日、赤芽球が $10,707/\mu\text{l}$ (有核細胞中43%)で、骨髄芽球や前骨髄球が観察され、急性白血病へ進行した。

第1,075病日に死亡した。病理検査では、造血細胞の増殖が肝臓、脾臓、副腎、および肋骨骨髄内で高度に観察された。異型性のある細胞増殖もみられており、急性骨髓性白血病(M6:赤血症性骨髓病)への進行が明らかであった。

【考察】ホモトキシコロジーによる治療は、MDSからAMLへの進行を止める事は出来なかったが、副作用も無く、16歳(1,075病日)までの約3年間、治療開始から約1年半(611日)、急性白血病の診断から約1年(387日=1,075-688)生存し、QOLを保てた事は、補完代替療法として有用であった。